

2018年度 聖学院大学総合研究所 埼玉税法研究会主催／聖学院大学教務課共催
**第7回 埼玉税法研究会
 修士論文構想報告会**

2018年11月24日（土）、聖学院大学4号館4401教室において、第7回埼玉税法研究会が開催された。参加者は、院生25名（病欠1名）、教職員8名、OB（2018年修了生の池田隆久さん）1名の、合計34名だった。

春の第6回埼玉税法研究会（5月12日）は、第一部を税理士会の認定研修会も兼ねた講演会、第二部を修士論文構想報告会としていた（本ニューズレター28号で報告済み）。税理士会の認定研修会は2時間を確保する必要があり、他方、修士論文構想報告会は全体で90分しか取れない。しかるに2年生が14名・1年生が12名なので、2年生は1人当たり報告3分・コメント3分とすることで時間いっぱいであり、1年生の報告は割愛せざるを得なかった。

また、夏期研修会（7月14日）は、今年度から午前中は教員のFD研修会が入ったため、論文構想報告会は午後のみになった。苦肉の策として、2年生は2班に分けて発表13分・コメント7分、1年生は全体会に戻し、終了時刻を18時過ぎまでに設定して、発表3分・コメント3分とした。ここでは、2年生に関しては2班に分けたため、コメントをする教員数が少なくなってしまった。

院生の人数が多いのは喜ばしいことだが、国税審議会の審査が厳格化すると予想され、論文作成の指導・支援を強化する必要に迫られている中、多くの研究科教員から多角的な指摘を受ける機会を拡張することが必要である。

そこで、今回の第7回埼玉税法研究会は、全日程を修士論文構想報告会に当てることとした。第一部（10:10～12:30）で2年生7人、第二部（13:30～15:50）で2年生の残り7人、第三部（16:00～16:36）で1年生12人とし、2年生は発表10分、質疑10分、1年生は発表2分、質疑1分という割り当てにした。

このようにして、春・夏の報告会に比べれば、報告時間を確保するとともに、指導担当教授以外

の教員からコメントを受ける機会を拡大した。その結果、この11月時点で相当程度論文を書き進めている人にとっては、さらなるブラッシュアップに向けて検討すべき素材を、それなりに得ることができたと思われる。他方、論文作成の進捗度が遅い人に関しては、具体的なコメントを得るのは難しかった。そのことを自覚して、12月以降に作業を加速するための発奮材としてもらえれば、と思う。税法専門の吉川教授、野田教授には、丸一日で多大なご負担をおかけした。税法担当以外の教員の教員の参加が重要であるが、あいにくこの日は学部の留学生入試や公開行事と重なっていた。掛け持ちで、ない時間をやりくりして参加していただけたけれども、そもそも日程の設定における選択ミスであったと反省している。

2月の論文審査に向けて、このタイミングに行う修士論文構想報告会の重要性を、改めて認識させられた。次年度以降は、今回現れた反省点も踏まえて、その持ち方を工夫していきたいと考えている。

（報告者：木村裕二 [きむら・ゆうじ] 聖学院大学政治政策科特任講師・埼玉税法研究事務局次長）

本 書籍のご案内

お近くの書店、Amazon.co.jpからお買い求めいただけます。

ベイズの誓い

——ベイズ統計学はAIの夢を見る

松原 望 著

2018年6月20日発行
3,200円（税別）

AIの元祖であるベイズ統計学の基礎から最新の応用までを学ぶ。

